



# 持続可能な開発目標 (SDGs) と図書館

## 千葉 潔

#### はじめに

昨年、SDGs達成のための取り組みの拡大、加速化を目的とした「行動の10年」がスタートするやいなや、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)という誰も予想しなかった災禍が世界を襲い、その目標達成に向けた進捗は大きな後退を余儀なくされた。各国政府やさまざまなステークホルダーは2030年に向けた取り組みを決意している。本稿は、コロナからの復興の道標となるSDGsの基本的なことがらを説明したうえで、SDGsとそのステークホルダーである図書館との関係を述べる。

### SDGsとは何か

SDGs は、2030年を期限として、世界を持続可能な開発の道筋へとシフトするための17の目標である。それは、2015年9月25日に国連総会で193の加盟国(150か国以上が首脳レベル)が全会一致で採択した「我々の世界を変革する:持続可能な開発のための2030アジェンダ(以下、2030アジェンダ)」と題する決議の中核を成す。

SDGs は、17の目標の下にターゲットが169個, さらにその下に指標が231個(重複含め247)設けられている。目標とターゲットはともに2030アジェンダに書かれたが、指標は別途つくられ、2016年3月に国連総会で採択された。指標はさらに毎年更新され、昨年3月に包括的な見直しが行われて現在の数となっている。

SDGs は、21世紀の幕開けにあたって開かれた「国連ミレニアムサミット」(2000年9月)で各国首脳たちが平和で公正な世界への決意を表明した「国連ミレニアム宣言」の履行をめざす「ミレニアム開発目標(MDGs)」の後継としてつくられ、MDGsの期限が2015年末に切れるのを待って、そ

の取り組み期間をスタートさせた。

持続可能な開発という言葉は、「環境と開発に関 する世界委員会 | が国連総会の要請を受けて1987 年に発表した報告書「我ら共有の未来」で「将来 のニーズを満たす能力を損なうことがないような 形で、現在の世界のニーズも満足させること」と 定義したことに源泉をもつ。その定義を踏まえて、 「リオ・サミット」(1992年6月)が持続可能な開発 のための「リオ原則」と行動計画「アジェンダ21」 を採択。その後、その概念を追求するプロセスは 発展的に引き継がれ、「リオ+20サミット」(2012 年6月)が成果文書として採択した「私たちが望 む未来」が経済、社会、環境の三側面を統合しそ の相関関係を認識するとともに、持続可能な開発 を主流化する必要を強調し、SDGsの策定をポス ト2015開発アジェンダの策定プロセスに統合する よう求めた。

持続可能な開発の三側面統合の考え方を取り込 んだSDGsの目標は、貧困根絶、飢餓、健康、平等 な教育, ジェンダー平等, 水と衛生, エネルギー, 包摂的で持続的な経済成長、完全雇用、レジリエ ントなインフラ、国内外の格差、持続的な都市づ くり. 持続的な消費・生産パターン, 気候変動. 海洋保全、エコシステムの持続的利用、平和的か つ包摂的な社会の促進,(資源動員を含む)実施手 段の強化など、実に多岐にわたる。2030アジェン ダはその冒頭で、SDGsをつくった加盟国の決意 を People (人間), Planet (地球), Prosperity (繁 栄), Peace (平和), Partnership (パートナーシッ プ)というPで始まる五つの英単語を使って説明 しているが、それがこの幅広く複雑に見える17の 目標群を構成する五つの要素をわかりやすく表現 するキーワードともなっている。

国連の創設以来、これほど幅広い目標を一気に

提示し履行を求める決議が採択されたことはな かった。MDGsが、貧困・飢餓、初等教育、ジェ ンダー平等、HIV/エイズやマラリアなどの疾病蔓 延 環境の持続可能性 (無差別な貿易・金融やODA を含む) 開発のためのグローバル・パートナーシッ プなどに関する八つの目標を立てて先例を示した が、それは社会的課題から経済、環境へと大きく 幅を広げることには抑制的であった。ただし、ア ナン事務総長(当時)が、ミレニアムサミットの フォローアップを求める国連総会(2000年12月)の 要請に応じて作成し、MDGsを提案した報告書 「ミレニアム宣言履行に向けたロードマップ」(2001 年9月) には、貧困をはじめ、移民の権利、人間 ゲノム編集の課題。防災、テロリズム、核兵器を 含む大量破壊兵器撤廃、安保理改革など、SDGsを はるかに凌ぐ50以上に及ぶ広範な目標が明記され、 課題間のつながりが指摘されていたことには留意 すべきだろう。MDGsは、事務総長がその包括的 な目標群から、国内・国際の開発政策の優先順位 づけを容易にし、また、誰もが理解しやすい内容 で幅広い人々に訴求できるようにするため、貧困 根絶を通じた持続可能な開発の追求に焦点を絞っ て戦略的に選び総会に提案したものだった。

2030アジェンダは MDGs と同様に国連総会で採 択された決議であり、安全保障理事会のそれとは 違って、法的拘束力はない。署名や批准などを経 た国際条約として採択されたものでもなく. 各国 に定期報告の義務もない。「ハイレベル政治フォー ラム (HLPF)」のもと、経済社会理事会で毎年、 そして、総会で4年に一度開催されるものとして、 「自発的国別レビュー(Voluntary National Review)」 の場が用意されたが、そこでの報告は文字通り、 各国政府の「自発的な」経験共有として行われる。 しかし、それでも各国政府によるSDGsへのコミッ トメントのレベルは高い。2030アジェンダが途上 国ばかりではなく先進国を含めたすべての国に共 通する課題解決を訴えていること、決議採択が首 脳レベルの全会一致だったこと. 包摂的な準備プ ロセスと実施に市民社会や企業、地方自治体を含 むあらゆるステークホルダーが関与していること. デザイン性に優れたロゴやアイコンによる訴求力 の強さも手伝って世界の人々の認知度が高いこと など、すべてが相乗効果を生んでいる。それに加 えて、SDGsが採用する目標・ターゲット・指標 の3点セットによって、2030年に向けた進捗が可

視化されていることもコミットメントのレベルを 高めているだろう。この手法の先駆けとなったの もまたMDGsである。前述の「ミレニアム宣言履 行に向けたロードマップ」は、それまでの国際会 議や1990年代の相次ぐ世界サミットで「約束」は もう十分に尽くされたとし、「約束」の確実な「履 行」と具体的な成果を求めて、この3点セットの MDGsを提案したのだった。

「誰一人取り残さない」。 ——SDGs に欠かせないこの合言葉は、2030アジェンダに書かれた国連加盟国の誓いの言葉である。その言葉には、国連開発計画(UNDP)の「人間開発報告」で1994年に提唱されて以来、国際社会で発展的に議論され、日本政府もその外交の柱の一つとして推進してきた「人間の安全保障」の考え方が滲んでいる。2030アジェンダにその用語自体は明記されていないものの、そこに散りばめられた言葉の中には、人々が恐怖と欠乏から解放され尊厳ある生命をまっとうできる社会をめざす「人間の安全保障」の概念が息づいている。

2030アジェンダは、今の世界に生きるすべての人が取り残されないことを確実にすることだけをめざしているのではない。2030アジェンダに繰り返し書かれている言葉は、「未来」である。2030アジェンダは、その実施が今日の世代ばかりではなく未来の世代のためであることを明確に述べ、今は目に見えない未来の人々の姿を心に描いて行動することを私たちに求めている。

## SDGsの進捗状況

2020年,世界はコロナ禍に襲われた。今もなおウイルス感染の拡大は続き、本稿執筆時点で、新型コロナウイルスの感染者と死者はすでに、それぞれ1億人、200万人を超えている。新型コロナウイルス感染症(COVID-19)は健康に対するグローバルな危機だが、同時に、経済危機、開発の危機、人道の危機、人権の危機をもたらしている。

SDGsの達成に向けた取り組みは深刻な影響を受けているが、コロナ禍に襲われる前から、その進捗状況はすでに厳しかった。「独立科学者グループ」が2019年9月、「SDGサミット」(4年ごとの国連総会でのHLPF)に向けて発表した、"The Future is Now: Science for Achieving Sustainable Development"(「未来はいまー持続可能な開発達成のための科学」)と題するグローバル・レポート(4年ごと)

はその時点ですでに、世界がSDGs 達成に向けた 軌道に乗っていないことに強い警鐘を発し、アン トニオ・グテーレス事務総長は「未来は私たちが 今何をするかで決まる」と述べ、行動の加速化の 必要を訴えていた。その状況にコロナ禍が追い打 ちをかけたのだ。推計によれば、2020年、パンデ ミックの影響を受けた世界経済は44%のマイナス 成長を記録。極度の貧困は20年ぶりに増加に転じ、 あらたに8800万人から1億1500万人が1日1.9ドル 未満で暮らす状況に追いやられたといわれる。

しかし、各国政府は、2030アジェンダをあきらめていない。昨年(2020年)7月にオンラインで開かれた国連ハイレベル政治フォーラム(HLPF)には各国政府から閣僚137人が参加して閣僚宣言を採択。関連の政府間機関に対し、SDGsの個々のターゲットの見直しや更新を要請しながらも、誰一人取り残さずに持続可能な開発の取り組みを続ける決意をあらたにした。また、12月には、COVID-19に関する国連特別総会がオンラインで初開催されたが、各国の代表は口々に、2030アジェンダの実現の重要性を強調。総会議長はCOVID-19の直接的な影響に対応するだけでなく、次のパンデミックに備えるためにもSDGsを道標とするよう訴えた。

## 図書館の役割

SDGsの達成には、あらゆるステークホルダーの協力が欠かせない。では、図書館はSDGsの目標達成にどう貢献できるのであろうか。

17目標のなかで、図書館にもっとも深い関係があるとされる目標はゴール16の「平和と公正をすべての人に」である。ターゲット16.10「国内法規及び国際協定に従い、情報への公共アクセスを確保し、基本的自由を保障する」はまさに図書館の存在理由に合致する。また、図書館は学校教育や生涯教育でも大切な存在であることから、ゴール4の「質の高い教育をみんなに」の達成における役割も重要だ。最近では、図書館がさまざまな企業や団体と連携することが多くみうけられるが、そうした連携は、ゴール17の「パートナーシップで目標を達成しよう」に沿うものといえるだろう。

図書館の貢献は、個々の目標達成への貢献だけに留まらない。さまざまな図書を収集・保存し、人々の利用に供する図書館は、2030アジェンダのビジョンと目標に関係する図書と人々の出会いを

つくる読書推進を通して、SDGsの全般的な達成に役割を果たすことができる。SDGs達成のための行動においては、社会で取り残されがちな脆弱な立場にいる人々、私たちからは遠く離れて暮らす国・地域の人々、未来の世界で生きる人々に思いを馳せる力が問われるが、図書館は、人々が知識を深め、想像力と共感力を豊かにし、そうした力を養うための助けとなる確かな資源と技術を持っている。図書館での一冊の本との出会いによる学びや気づきが、実際的かつ具体的な行動につながるケースも多くあるだろう。社会のデジタル化とともに図書館のサービスの形もいろいろと変容していくと思われるが、「行動の10年」に図書館が果たせる役割は大きい。

## 国連と図書館

国連は、図書館が担うかけがえのない役割を認識してきた。さまざまな国連機関にはそれぞれ独自の図書館が設置され、国連事務局でもグローバル・コミュニケーション局 (DGC) のもとにダグ・ハマーショルド図書館が置かれている。国連は、地球規模の問題に対応すべく、専門機関や地域機関といった政府間機関、市民社会、民間セクター、メディアなどとのパートナーシップを構築しているが、世界各国の図書館もまた国連創設当初からのパートナーである。ダグ・ハマーショルド図書館は世界の約140か国の350を超える図書館を「国連寄託図書館」に指定し、それら図書館とともに国連とその活動に関する啓発を行っており、さらに現在、SDGsを軸とした関係発展のための見直しが進められている。

国連ダグ・ハマーショルド図書館はまた、国連経済社会理事会と協議関係をもつ非政府機関(NGO)である国際図書館連盟(IFLA)と密接な協力関係を築いている。ハイレベル政治フォーラム(HLPF)の開催期間中、同図書館はIFLAとイベントを共催しSDGs達成に向けて図書館の果たす役割について議論している。また、IFLAは、HLPFの自発的国別レビュー(VNR)における図書館の扱いを調査したり、図書館のSDGsへの貢献の仕方をまとめた冊子をつくったり、国連が立ち上げた「SDGブッククラブ」のプロジェクトに参加したりしている。このプロジェクトは、国連、出版界、図書館界、児童図書館界などのメンバーが世界の子どもの本をSDGsの目標ごとに、そのテー

マに沿って数冊ずつ選び紹介するものであり、目標3の特集においては、日本の天童荒太(てんどうあらた)さんの「どーした」どーした」の英訳本 "What What What?" が紹介された(国立国会図書館国際子ども図書館がゴールごとの選書リストを邦訳しオンライン公開中)。

## SDGsと日本の図書館

国連グローバル・コミュニケーション局 (DGC) 直属の国連広報センター (UNIC) は、日本の国連加盟から2年後の1958年、東京に開設された。UNIC は設置当初から、国連寄託図書館(現在、国内各地に14館)を大切なパートナーとして活動してきたが、21世紀に入ってからは、国連寄託図書館を中核としながらも、そのほかの公共図書館や大学図書館、専門図書館ともゆるやかなつながりを築いてきた。最近では、SDGsを合言葉にして、さらにネットワークを広げ、学校図書館とも関係を構築している。

UNICはこうしたゆるやかにつながる図書館と特に公式の契約を交わすことはないが、さまざまな形で協力し、SDGs 関連イベントに関する相談があれば積極的に応じたり、SDGs に関連する国連文書や書籍を紹介したりするなどしている。年に一度開催している国連寄託図書館の研修会にもこれらの図書館を招いている。14の国連寄託図書館に加えて、UNICとゆるやかにつながる図書館は現在、約50館。日本全国の図書館総数を考えれば、まだ数は少ないが、このネットワークの図書館が発するSDGs 実践事例は、UNICのブログなどを通じて、広く発信され、SDGsへの取り組みを考える日本各地の図書館に活用されつつある。

これら図書館の多くがすでに取り組んでいるのが、SDGsをテーマにした別置である。広い閲覧室に陳列棚を置いて書籍を並べている図書館もあれば、開架式書架にSDGsのアイコンを貼ってインテリア風に書籍を並べている図書館もある。また、図書館によっては、ウェブサイト上にSDGs選書を掲載しているところもある。日本十進分類法の制約から図書を解き放つ別置という手法は、これまでも図書館では日常的に採用され、期間限定の単一テーマ展示や幅広いテーマでの常設展示が行われてきたが、SDGs選書は、17の目標のアイコンのもとに、ピックアップできる図書のジャンルが格段に幅広い。SDGsは2030年までの目標

であることから、そのための選書も期間限定とはなるが、図書は定期的に入れ替えて鮮度を維持しつつ、過去の選書リストはウェブサイトに掲載すれば、貴重なアーカイブとして後世に残るだろう。また、図書館を利用する市民や学生から17のテーマごとにおススメ本を募って展示すれば、参加型の別置となって利用者と図書館の距離を一層縮めることに役立つはずだ。さらに、SDGsの17分類というところから、総記(0類)から文学(9類)まで壮大なストーリーを描く十進分類法の奥深い世界へと案内するのもよいかもしれない。

もう一つ、特に学校図書館に紹介したい取り組みがSDGsブックトークである。生徒がそれぞれ他の人に推薦したい本を持ち寄って、SDGsに関連づけて紹介しあい、SDGsと本をリンクさせて、地球に生きる人間が直面する諸課題と持続可能な未来へと思考を柔軟かつ豊かに広げ、それを言葉にして共有する。子どもたちの主体的・対話的で深い学びの実現(「アクティブ・ラーニング」)に最適であり、これもまた、SDGs分類の選書展示と同様に、図書館の活動にあらたな可能性を広げることに役立つかもしれない。コロナ禍の中、学校図書委員の生徒たちが自発的にオンラインで実践する事例もでてきた。

図書館における取り組みは必ずしも大きなお金や人的資源を投入しなくても、ちょっとした工夫やアイデアで、たくさんの利用者を確実に図書とSDGsへと誘い、私たちの共有の未来に向けて想像力を広げ、目標達成のための行動へと促せる。今後、さらにSDGsを合言葉にした、ゆるやかな図書館のつながりの輪が広がり、さまざまな図書館の活動事例が全国各地の図書館と活発に共有され、図書館の発展とSDGs 達成への貢献につながることを願ってやまない。

## 参照サイト

図書館はどのようにSDGsに取り組んでいるのか (UNIC プログ) https://blog.unic.or.jp/entry/2020/03/19/164517

\*本稿の内容は、国連あるいは国連広報センターを代表するものではない。文責はすべて筆者個人にある。

(ちば きよし:国連広報センター) [NDC10:010 BSH:1.持続可能な開発 2.図書館]